

Title	福沢百助著 『果育堂詩稿』(二)
Sub Title	The translation and notes of Koikudo (A collection of poems written by Hyakusuke Fukuzawa) (II)
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro) 『福翁自伝』を読む会("Fukuo jiden" o yomu kai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.51- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢百助著 『果育堂詩稿』 (二)

佐藤 一郎 訳注

『福翁自伝』を讀む会 補注

(作品11) 題画

画に題す

江雨初晴水漲津 江雨初めて晴れ水津に漲る

秋風重理旧絲綸 秋風に重ねて理す旧絲綸

短簑圓笠漁翁面 短簑円笠漁翁の面

唯有沙鷗認得馴 唯沙鷗の馴を得るを認めるあり

語釈 絲綸 釣り糸。

簑 蓑とおなじ。みの。

短評 唐の柳宗元の「江雪」の第三句に「孤舟蓑笠翁」とあるように、伝統的な詩題。百助の詩は大雨の後の渡し場の光景であり、なぎさにはカモメも羽を休めているのであるから、海も遠くないはずである。どこか百助の故郷中津北郊山国川の光景を思わせるものがある。

ただしこの作品は、最初の上方旅行中に作られたものであろう。

福沢百助著『果育堂詩稿』(二)

(作品12) 過雲母嶺

雲母嶺を過ぎるまらら

懸崖万仞嶺千重 懸崖は万仞嶺は千重

雲氣嵐光迫蕩胸 雲氣嵐光迫りて胸を蕩すうごか

偏怪人間芒種節 偏ひとえに怪じんかんむ人間芒種の節なるに

樹間黄鳥草間蛩 樹間の黄鳥草間の蛩むじ

語釈 雲母嶺 京都より叡山への順路の一つ。

「むかしは、京から勅使などが叡山にのぼるのは、多くは雲母坂をとった。僧兵が、高齒の下駄をとどろかせながら山から降りてくるときも、多くはこの雲母坂を経、赤山大明神のそばに出た。……いまは、雲母坂は廢道にちかい。」(司馬遼太郎「叡山の諸道」「街道をゆく」所収)

(作品13)の「叡山に登る」の詩の原注「叡山之僧侶」も、当然のことこの道を通って都に入ったのであろう。芒種 二十四節気の一。太陽曆六月五日ごろ。旧曆の五月に相当する。この「芒種」によって旅行の時期が確定できる。

人間 人間世界・世の中。

節 節の異体字。(『宋元以来俗字譜』)

短評 やゝ民間文学的手法を用い意識的に「間」の字多用の効果をねらっている。また、今回の上方旅行が、七月の「被召出、二人扶持頂戴、御用所御取次」に任官以前であることを、この詩により証明できる。

補説 このころ大坂には、異色の学者近藤重蔵と大塩平八郎がいた。杉浦明平『化政・天保の文人』(NHKブックス 昭和52)の「近藤重蔵」の項でいう。「文政二年(一八一九)幕府はかれを書物奉行から大坂の弓奉行に栄転させまし

た。……一方、大塩平八郎もこれまた一癖も二癖もある男ですが、重蔵の千島探検の赫々たる勇名をきいており、また学者としても一流というので、平八郎の方が重蔵をたずねてゆきました。」

ただし重蔵は勤め方不相応のかどで二年たらずで大坂弓奉行を免職、江戸へ召し返され小普請入りしている。

現代語訳

万仞の谷 千重の山

靈氣 わが胸に迫り

まだ芒種のころだというのに

木の間には鶯 草むらには秋の虫たち

(作品13) 登叡山

叡山に登る

挿雲青壁望崔嵬 雲を挿す青壁の崔嵬たるを望む

中有無量浄界開 中に無量浄界の開くあり

北峙千年鎮王室 北に峙して千年王室を鎮め

西来丈六表天台 傳云、僧最證開道場、擬彼土天台山 (原注) 西より来りて丈六天台を表す

異禽驚客知峯邃 異禽客に驚きて峯の邃きを知り

苦霧侵衣覚雨催 苦霧衣を侵して雨の催すを覚る (以下、改字を次の如く略記…「遮」↓「侵」)

輦下復無鴨川歎 白河帝嘗曰、不如朕意者、鴨川之水、叡山之僧侶 (原注) 輦下復た鴨川の歎なし

山門猶見幾樓臺 山門猶お見る幾樓台

語釈 挿雲 『文選』卷十二、木華の「海賦」に、「魚則横海之鯨…巨鱗挿雲、鬚鬣刺天。」とある。(巨鱗は雲を挿し、

鬚鬢は天を刺す)この雲を挿しは、雲に入るの意味である。

無量 はかり知れないこと、莫大なこと。

丈六 一丈六尺、釈尊の身長は丈六であったという、またその仏像。

短評

「苦霧遮衣覺雨催」から「侵衣」に改めた苦心の一句が、もっとも優れている。「異禽…」「苦霧…」の対句も凡手ではない。全体の流れも、天台の靈域を自然環境、歴史的事実を踏え、さらに自分の視点から執え直して描写しており、説得力がある。

補説

儒学と仏教との関係について、由木義文『日本仏教思想史』(世界聖典刊行協会) P179. のように二人の儒者(藤原惺窩・林羅山)にみられるごとく、江戸期には人倫、ならびに秩序ある社会を重要視する儒者の思想が、時代の思想をになったのであった。そして、林羅山が指摘しているごとく、人倫を等閑視した仏教も、その体制に相応しい思想的変容をなすことが求められてくる。すなわち、世俗の倫理と仏道修行が接近してくるのであった。この傾向は江戸初期には鈴木正三、江戸中期には白隠に、江戸後期には大我、慈雲、法住などに色濃くみられるのである。」

(作品14) 望平安城有感

平安城を望みて感あり

引杖至城隈

杖を引きて城隈に至り

回首懷往古

首を回らして往古を懷う

芒々蜻蜒洲

芒芒たり蜻蜒の洲

聖神嘗拓宇

聖神嘗て宇を拓けり

先自吾海西

先は吾が海西よりす

君々又父々

君君たり又父父たり

先皇順天意	先皇天意に順い
東征相沃土	東征して沃土を相し
鞭笞驅蛇龍	鞭笞もて蛇竜を驅り
渠魁乃就虜	渠魁乃ち虜に就けり
社稷定鴻基	社稷鴻基を定め
帝徳海内普	帝徳海内に普し
黎民仰睿知	黎民叡知を仰ぎ
慈孫諡神武	慈孫神武と諡す
中葉頻遷都	中葉頻に遷都するも
懷來忘勞苦	懷來しては勞苦を忘る
終來鴨川澚	終に鴨川の澚に來れば
山河實天府	山河實に天府なり
金鳥駕青竜	金鳥青竜に駕し
玉兔跨白虎	玉兔白虎に跨る
經始起土功	經始して土功を起し
匠人施規矩	匠人規矩を施す
九陌何井然	九陌何ぞ井然たる
紫微臨萬戶	紫微萬戶に臨み
寶祚萬億年	寶祚萬億年

綿く自七五

綿綿おのず自から七五

文物見古風

文物古風を見

禮楽唯鄒魯

礼楽唯ただ鄒魯さうろたり

徒倚朝陽門

徒らに朝陽門に倚れば

人稀月未吐

人稀れに月未だ吐かず

緑水繞御溝

緑水御溝を繞めぐり

暮雲掩廊廡

暮雲ろうぶ廊廡を掩う

寂寞我将帰

寂寞我れ將に帰らんとすれば

帰鳥蔵林陽

帰鳥りんお林陽に蔵かくる

玉階邃且深

玉階おくふか邃く且つ深し

安聞于羽舞

安いずくんぞ羽舞を聞かん

語釈

蜻蜒洲 『古事記』に見えるわが国の古称。

先自吾海西 先は先祖。高天原高千穂説に基く。

君君又父父 君君たり、臣臣たり、子子たり。『論語』顔淵篇。

相沃土 相は相人、相馬、すなわち人相を見る、馬のよしあしを見分けるの相と同じ。

懐来 諸侯をなづけ、百工を来らしめる。来百工也：懐諸侯也。『中庸』この項、富田氏に依る。

天府 地味肥沃で物産多き国。要害よき国。例えば中国では蜀（四川）。

金烏玉兔・青竜白虎 前者は日月の異名で、後者は東西の方向を意味する。太陽は東に現われ、月は西に没するの

意味。あるいは『万葉集』の皇室に対する頌歌「ひむがしの野にかぎろいの たつ見えて かへりみすれば月か

たぶきぬ」の漢詩訳かも知れない。この項、富田氏に依る。

経始 土木をはじめの意味。

九陌 朱雀大路で左右兩京に分け、それぞれ東西を九条に分けた。

七五 平安京に遷都して四十五代聖武天皇から百二十代仁孝天皇まで七十五代。

郷魯 孟子は郷の人、孔子は魯の人。

朝陽門 明・清の王城である北京内城の門。南面し、もっぱら皇帝の出入に使用される。禁裏御所の建礼門に相当しよう。

御溝 禁裏御所（のちの京都御所）周辺の小溝を御溝水みかわみずという。水源は加茂川。中国で御溝は宮城の堀を意味する。

廊廡 廊は「わたどの」、廡は「ひさし」御殿の母屋につづいた「ひさし」をいう。御所の廊の多くは、第二次世界

界大戦中、類焼に備えて撤去された。

陽 塙とおなじ。土手、とりで。

羽舞 白羽の束を用いて舞う舞楽の名。古代中国に発生する。

短評 叙事の長詩は百助の得意とするところ。事実の選択も適切である。

補説 文政年間にはわが国の歴史についての一般的な知識が、急速に昂まってきた時代である。頼山陽の『日本外史』が刊

行されるのは文政十年であるが、写本はその十年ほど前からひろく行なわれた。『日本外史』の刊行より一年はやく文政九年には、源松苗（従五位下行大舍人助兼音博士）の『国史略』が刊行されている。いずれも勤王史観が反映されていることはいうまでもない。

奥平家は表高十萬石、文化十三年には藩主昌高が溜間詰格に昇格しており、譜代藩でもっとも格式の高い藩の一つである。しかし教養ある人びとの間に、京都の朝廷の存在がようやくやく意識にのぼりだしている。百助の師万里は、

のちに時勢を慨嘆し京都に上っているし、淡窓も西国郡代の代官所のある天領日田にありながら、朝廷を尊重している。

徂徠や新井白石の幕府朝廷に対する認識と、時勢は明かに違って来ていた。このような事情が百助のこの詩にも反映している。

しかし漢学者の間では、中国史についての知識が国史に対する知識より圧倒的に深いのが普通であった。維新史を動かした長州の吉田松陰の時代ですら、松陰は萩の野山の獄に入獄中にそのことを反省して日本歴史の勉強に励んでいる。「吾れ幼にして漢籍にのみ浸淫して、尊き皇国の事には甚だ疎ければ、事々に恥ぢ思ふも多けれど、…「坐獄日録」『吉田松陰全集』第六卷所収、大和書房版）

(作品15)

寄題泰勝菴牡丹

菴在京都大徳寺中

題を泰勝菴の牡丹に寄す

紅衣不肯深塵縁 紅衣は深き塵縁を肯うべなわず

一種清香伴坐禪 一種の清香坐禪に伴ともなう

借問舟岡山下鹿 借問す船岡山下の鹿

時々脚去奉金仙 時時脚くわえ去りて金仙に奉ぜん

語釈 泰 泰は泰の俗字か？

菴 菴は菴の俗字。

紅衣 ところは紫野、牡丹の色は紅、そして袈裟の色も紅か。百助の好むは、すべて中国原産か異国趣味の花である。

大徳寺 京都紫野臨濟宗大徳寺派大本山。塔頭たつちゆうの数も明治維新までは五十六を数えたが、現在はその半数である。

〔世界大百科事典〕

舟岡山 現在の船岡山公園、建勲神社の所在地。大徳寺の南西、北大路通をへだててすぐの小丘、むかしは紅葉の名所であった。

金仙 仏の異称。紅葉と響きあう。

現代語訳

紅衣べにころもこの塵の世と縁ゆかりなく

坐禅の場に清香そこはかとなし

船岡の麓の鹿よ啣え去りておりふし

金仙に奉ずるか

(作品16) 遊東寺賞蓮

東寺に遊びて蓮を賞す

經過黄塵試叩門 黄塵を經過して試みに門を叩く

珠林自有別乾坤 珠林自から乾坤を別にするあり

幽情忘却人間暑 幽情忘却す人間の暑

満袖香氣起後園 袖に満つる香氣後園より起る

池頭竹榻納涼時 池頭の竹榻ちくた納涼の時

更向荷花深處移 更に荷花深き処に向いて移る

店婦捧来蓮葉飯 店婦捧げ来る蓮葉の飯

花時寺中有売食者小切蓮葉為飯

福沢百助著『臬育堂詩稿』(二)

餽餘還自與游龜

餽餘しゆんよは還また自ら游龜あたに与う

日落山門鎖暮煙

日は山門に落ちて暮煙鎖す

香苞一餉歛如眠

香苞一餉おき歛おむめて眠れるが如し

醉來擬結莊周夢

酔い来りては擬す莊周の夢を結びしに

化蝶從容接水仙

蝶に化して從容として水仙に接せん

小荷卷く大荷盆

小ちさき荷はすは卷まりたり大なる荷は盆のごとし

紅白香薰引醉魂

紅白の香薰酔魂を引く

一陣清風一壺酒

一陣の清風一壺の酒

涼棚人去月黄昏

涼棚人去りて月黄昏

數點流螢頻促歸

數点の流螢しき頻りに歸るを促うながす

徘徊猶惜賞心違

徘徊して猶なお惜しむ賞心しょうしんに違ちがうを

莫哈醉袖拂蓮葉

哈わらう莫なれ酔袖の蓮葉を払はらうを

欲使清香留葛衣

清香をして葛衣に留め使めんと欲す

語釈

東寺 京都西九条にある真言宗東寺派總本山。東寺の弘法さんと呼ばれる市で、一般市民にも親しまれている。東門を入ってすぐ池があり、この一帯に茶店や露店が出る。

珠林 寺院の異称。

餒余 食べ残し。

水仙 水中の仙人。

巻卷 ここでは拳（にぎりこぶし）のようとの意か。

賞心 風景をめぐる心。

短評

作者百助は上方旅行中のある夏の一日、この地に清遊を試みたのであろう。もちろん招待ではないし、同行者があつた様子も字面からは窺えない。しかし、いつの間にか酒の度を過し、螢の飛びかう夕暮とはなった。これも心に鬱屈するものがあるからだろうか。そうとしても、やはりまた塵世における心の洗濯の一つであるには違いない。

（作品17） 己卯十二月、同山君彝訪森君則分得韻微。

己卯十二月、山君彝いと共に森君ともを訪ね、則ち分ちて韻微を得たり。

偶叩龍松寺畔扉 偶なまたま叩く竜松寺畔はんの扉

寒林鳥返帶斜暉 寒林鳥返りて斜暉しゃきを帯ぶ

酒杯先話兼旬潤 酒杯先ず話す旬を兼ねて潤うるかりしを

爐火偏飲一夕圍 爐火ひと偏えに飲ぶ一夕の圍

客氣已消無物我 客氣已に消えて物我ぶつがなし

詩情欲動有真機 詩情動かんと欲して真機あり

相逢品字梅窓下 相あい逢う品字梅窓の下

不着人間是與非 人じん間是かんぜと非とを着つけず

語釈 畔 かたわら。

兼旬潤 十日以上も会っていないなかったか。この個所、富田氏に従う。

斜暉 斜陽。

物我 外物と自己。「客機已消無物我」の句は『莊子』的世界。

真機 まことの機縁。

品字 品という字のように、三人の人間や三点の物が並ぶこと。

短評 第三句、第四句の対句、すなわち頷聯と、第五句、第六句の対句、すなわち頸聯の対照が妙を得ている。「酒杯先

話兼句濶」は、三人の交遊関係の状況を適確に表現して絶妙である。

「炉火偏歛一夕围」は、まずは穏当な付方であろう。これも描写はきわめて具体的である。

それに対して頸聯は一つの認識の世界であり、莊子的な人間界自然界融合の境地を示す。

かくて、第七句の再び具体的な描写と、第八句の俗世間から超然たる君子の境地の表現へと導かれるのである。

福沢一族交遊関係 これは上方旅行から帰郷後の作品であり、百助はすでに公務に就いている。この森君と（作品10）の

森深平との関係如何。河北展生氏によれば、竜松寺は中津留主居町の福沢家の一本裏の通りに現存する。寺の前通りの数軒先に藩士で森家の屋敷があった。

（作品18） 己卯十二月、賦梅花賀櫻温夫筮仕。己卯十二月、梅花を賦して桜温夫の筮仕を賀す。

苦節衛寒積雪中 苦節寒を衛る積雪の中

耻他軟紫与柔紅 他の軟紫と柔紅とを耻ず

枝頭雨露東君意 枝頭の雨露東君の意

欲使清香放下風 清香をして下風に放た使めんと欲す

語釈 筮仕 占いて仕えること、またはじめて仕えること。

雨露 「雨露之恩」の成語もあり、万物を生育させる雨と露の意味。

東君 太陽の神、春の神、ここでは主君か。

下風 かざしも。

福沢一族交遊関係 桜温夫は桜井温夫。(作品5の一)にも同一人物が出る。河北展生氏いう、文政二年十二月三日、表小姓二人扶持。天保九年、故ありておいとま。当主は兄次峯で上士供番、数代前は百五十石取り(明治五年写の分限帳では二百石取り)の中津藩士である。

この作品は、桜井温夫の文政二年十二月の出仕を祝って贈られたものである。

文政庚辰(文政三年一八二〇、二十九歳)

(作品19) 春雨、分得韻微

春雨、分ちて韻微を得たり

窓湿りて川雲暗し

連朝好雨霏 朝を連ねて好雨霏々たり

午風醒柳眼 午風柳眼を醒まし

春漲洗苔衣 春漲苔衣を洗う

水面氷全解 水面の氷は全て解くるも

池頭草未肥 池頭の草は未だ肥えず

陰晴杲可卜 陰晴杲として卜すべくんば

蠟屐問芳菲 蠟屐芳菲を問わん

語釈 連朝 来る朝も来る朝も。

柳眼 柳の新芽、眼のように細長いからこの名がある。

福沢百助著『杲育堂詩稿』(二)

苔衣 こけごろも、世捨人の着るそまつな衣服。

杲 あきらか、詩稿の名称、杲育の杲と同一文字。

蠟屐 蠟をひいて防水をほどこした足駄。履物問屋を生家とする川村博通氏いう。蠟は防水のため用いるものであると。ちなみに江戸時代蠟は幕府財政をうるおした特産の一つであり、中津藩に隣接する天領日田には、蠟屋を営む数軒の富豪がいた。(広瀬淡窓の子孫・広瀬恒太氏談)

芳菲 花のよいにおい。

補説 韻字、霏・衣・肥・菲。(作品17)も微韻である。この歳、嘉慶帝没し、道光帝即位。清朝もようやく衰運に向い、道光十九年(一八三九)には阿片戦争が勃発するのである。

福沢一族交遊関係 詩会での作品であろう。第三句、第四句の対句の朱点は誰が施したのだろうか。詩稿を見せられた友人か、百助の一族、あるいはその子孫であろうか。

(作品20) 看東隣梅戯賦

東隣の梅を看て戯れに賦す

簾前小立与誰同 簾前の小立誰と同じうせん

疎影横斜煙月中 疎影横斜して煙月の中

休卜東隣論可不 トウを休めよ東隣可不を論ずるを

梅花自作主人翁 梅花自から主人の翁と作る

語釈 小立 ちょっと立ち止まる。宋の楊万里「夏夜追涼詩」

夜熱依然午熱同 開門小立月明中

同・中の脚韻まで楊詩を踏える。

疎影横斜 富田正文氏いう、宋の隱士、林和靖の「山園小梅詩」に、「疏影横斜水清浅」とある。
短評 この時代の一般の詩風として、宋詩の影響が深まっている。

補説 この頃中津藩の財政悪化。文政三年三月もともと依存度の高かった大坂の豪商加嶋屋広岡久右衛門に禄千石の朱印を給付する。(黒屋直房『中津藩史』昭和十五刊) 他藩同様経済的には大坂商人に頭のアがらない状況になったのである。昌高の昇格運動も財政困難の原因の一つとなつたろう。

福沢一族交遊関係 『福翁自伝』を読む会、第四回月例会記録(昭和47年7月14日)掲載の「中津・福沢旧宅附近」(一)年代未詳の図によれば、通りに向つて福沢三之助(諭吉の兄)家の左隣は下村右兵衛家(十五石)、右隣は渡辺弥市家(十三石)、裏隣りは一族中村術平家(十三石三人扶持)、向いは井口三蔵家(十三石)である。福沢家は百助の代は十三石二人扶持。

(作品21) 寄野君美

野君美に寄す

客舎秋風落木晚 客舎の秋風落木おそし

一鳧翱翔一鳧返 一鳧は翱翔として一鳧は返る

故林帰来心不平 故林に帰来すれど心平かならず

回首曾遊去路遠 回首す曾遊ゆ去く路の遠きを

衛門就列学不優 衛門列に就けども学は優すぐれず

簿書試学御家流官府所用文字有一様書法、曰御家流 簿書試みに学おんふ御家流

牙籤不触書幾蠹 牙籤がせん触れざれば書も蠹むしうに幾ちかし

期會有時不暫休 期会時あるも暫くも休めず

近来不伸遊山脚

近来伸のびず遊山の脚

絆こ羈初知官路悪

絆はん羈初めて知る官路の悪きを

五斗頻折小吏腰

五斗頻りに折る小吏の腰

固知疎柳枝条弱

固もとより知る疎柳枝条の弱きを

嘗下四明拂白雲

嘗かつて四明じめいより下りて白雲を払えば

琵琶湖上夕照曛

琵琶湖上夕照の曛かけあり（苦過↓琵琶。対↓夕また夕に○印。鼈頭の共字に○印あれど抹消）

古驛怪松帶雨暗

古驛の怪松雨を帯びて暗く

山寺晚鐘隔岸聞

山寺の晚鐘岸を隔へだてて聞きゆ

買得湖中三尺魚

買かい得たり湖中三尺の魚

登樓高歌酒方釀

登樓高歌して酒方まさに釀よう

江山有情容吾輩

江山うじ有情にして吾輩わがを容いれ

書劍到处無俗紛

書劍到る処俗まさに紛まれるなし

如今還欲尋前盟

如今また還前盟を尋ねんと欲するも

真味無奈涇渭分

真味いかん奈するなし涇渭けいゐの分わかたるるを

語釈

落木 落葉した木。南国、豊前中津での落木は早く、上方や江戸のそれはやや遅いのであろう。

一鳧 イチフ、一羽のカモ。

翱翔 コウショウ、飛びまわる。

衛門 原義は禁中の諸門、ここではお城勤め。

御家流 原注に、「官府用いる所の文字に一様の書法ありて、御家流と曰う」とある。これは漢語ではなく和語。

諭吉の『旧藩情』（明治十年）にいう。「上等士族は習字に唐様からようを学び、下等士族は御家流を書き、世一般の氣風にて之を評すれば、字の巧拙を問わずして御家流をば俗様として賤しみ、之を書く者をも俗吏俗物として賤しむの勢を成せり」

牙籤 ガセン、象牙で作った書籍の標題の札。分類の見分けに用いる。

期会 友人と会う機会。

絆羈 ハンキ絆は物をつなぎとめるもの、羈はつなぐ。羈絆と同じ。束縛。

五斗 五斗米、ごくわずかな禄。

四明 比叡山の山頂は、四明が岳と大比叡の二峰から成る。前者は標高八百四十メートル。中国の四明は万斯同の故郷。

書劍 劍・『咸宜園出身二百名略伝集』51頁の島田虎之助の項に、「中津奥平藩出身、幕末の劍客（直心影流島田派祖）、号は見山、一に峴山。虎之助は、福沢諭吉の父百助の親友であった。はじめ学問に志し、広瀬淡窓・旭莊について学んだが、……」

涇渭分 涇・渭はともに川名。陝西省西安（むかしの長安）のほとりを流れる。涇水は濁り、渭水は澄む。

短評 学問の家に生まれた友人に、不本意な小吏としての勤めと、抑え切れぬ儒学・詩文への想いを切々と訴える。しきりに比叡、琵琶湖周辺の景が出てくるところから判断すると、野本君美は京都に滞在していたのであろう。この酒宴の主はもとよりかつての君美と百助である。

冒頭の二句と結びの二句は完全に照応し、本詩のその間の運びも躍動的で平凡でない。「嘗下四明払白雲 琵琶湖上夕照曛」の表現は雄大でかつ鮮明であり、「古駅怪松帯雨暗 山寺晚鐘隔岸聞」の対句は秀逸である。

補説 ○広瀬淡窓『懐旧楼日記』の文政三年（歳三十九）二月二十六日の記事に、「月旦二名ヲ録スル者、一百三人ナリ。

月旦百人ニ上ル事、此時ヨリ始マル。四月二十日ニ至リテ、在塾生五十四人ニ及ヘリ。初メ予廿四ニシテ、教授ノ事ヲ始メシ時、筑前亀井先生ノ門下ヲ盛ナリトス。塾生廿四五人モアリシナルヘシ。予カ業ヲ開キシ前後ニ、筑ニテハ江上源蔵、豊ニテハ帆足里吉、皆門戸ヲ開イテ、弟子ヲ引ケリ。両三年前ニ及ンテ、亀井江上帆足及ヒ予カ塾、何レモ塾生多キ時ハ、三十人ニモ及ヘリ。九州ノ学徒、此ニ於テ盛ナリトス。今年ニ至リテ、予カ塾五十人ニ及フ。其盛ナルコト、他塾ニコエタリ。是世上文学ノ運、一変スルノ始マリナリ。」

百助が万里に入門の頃には、同塾と淡窓の規模はほぼ同じであった。文政三年に至って淡窓門が人数的に他の漢学塾を圧倒することとなった。

○安井息軒、大坂にて篠崎小竹に学ぶ。(斯文会編『日本漢学年表』大修館)。

小竹は豊後の医家、加藤吉翁の子で、篠崎三島(文化十年三十日没)の養子。

福沢一族交遊関係 ○野君美・野本一族は字に美を多くつける。例えば帆足万里の十哲、白巖は字は伯美。この詩の時代は白巖の父藩儒雪巖(天保十三年歿)のところで、その兄弟が君美か。安西敏三氏、君美すなわち白巖かと疑うが、無理がある。また頼山陽に「送野本君美遊芳野」の詩ありというが未確認。

○河北展生・『草創期の慶応義塾と中津藩士の入門』(慶応義塾昭和54年7月)の36頁に、「野本家は野本雪巖という中津藩の儒者の家柄で、実は福沢先生のお父さん百助と深い関係があるのではないかと想像されるわけです。と申しますのは、野本雪巖の奥さんというのは、中津藩の下士階級で、元染物屋で絵書きの片山東籬という人の娘を嫁にもらっております。……その東籬の娘の一人が染物屋の次男にお嫁に行っている。その染物屋の息子の弟が中村栗園(万里の十哲)と申しまして、福沢先生のお父さんが亡くなった時に駆けつけて来て、そうして福沢先生を懐ろに抱いて、お母さんや兄弟達がみんな故郷へ引揚げる時に見送ってくれた中津藩出身の学者で後に水口藩の儒者に取り立てられた人で、お父さんの百助が兄弟のように可愛がり、大坂で福沢家に親しく出入していた人であります」。

○片山東籬…『近世日本の儒学』徳川公継宗七十年の祝賀記念（岩波書店）所収の高田真治「三浦梅園の学風と南豊の儒学」に次のようである。更に梅園の肖像画に題した詩に、

峨眉之山 高峰軼雲 降生先生 英雋超群 洞覽天地 殫極鬼神 条理之説
数十万里 闡發幽蹟 以覺斯民 屢辭聘命 抗志守玄 遺像肅然 想見其人

戊辰二月 帆足万里拝読

是れは片山東籬画く所の肖像に題したものであるが、如何にも良く梅園の学風識見人格を表はし、且つ推尊の至れるものを窺ふことが出来る。

○帆足万里の「雪巖先生墓碑」にいう、「……初中津人尚武、自童渚及先生経明行脩、誘以道術、国子弟彬彬然知嚮学」

○文政三年、百助の父兵左衛門、多病のため致仕す。

文政辛巳（文政四年、一八二一、三十歳）

（作品22） 春興

春興 しゆんきよう

梅花昨夜綻春風

梅花昨夜春風に綻びぬ

耻我相看詩思窮

我と相看るも詩思に窮するを耻づ

勿怪近来無一句

怪む勿れ近来一句なきを

吾儂日入簿書叢

吾儂は日々に入り簿書の叢

短評 小吏の日常は詩情のさまたげとならう。詩題を「春興」としているのも、皮肉である。

補説 ○中津在住の史家嶋通夫氏によれば、百助の住む留主居町（留守居とも記す）の下士は、下士のなかでももつとも

有能な人びとが多かったという。のちの百助の身分は、下級武士としては最上位の中小姓という家格にまで昇った。

拙稿「蔵役人福沢百助をめぐる大坂文壇」(『芸文研究』40号)参照。

○文政四年二月、大坂の代表的町人学者、山片蟠桃死す、七十四歳。懷徳門下の孔明と称せられた。『夢之代』十卷の著者である。末中哲夫『山片蟠桃の研究』二卷(著作篇、夢之代篇)清文堂、また『日本思想大系』43として『富永仲基山片蟠桃』がある。松本芳夫「山片蟠桃の歴史観」(『斯道文庫論集』第二輯)。

(作品23) 過某氏別荘

某氏の別荘を過る

到来忘却事機多 到り来れば忘却す事機の多きを

緩歩南坡且北坡 緩歩す南坡且北坡

水満平田暮山緑 水は平田に満ちて暮山緑なり

村々互報挿秧歌 村村互に報う挿秧の歌

語釈 過る たち寄る、訪れる。

到来 来の意味はごく軽く、「到来」で、到らば、ぐらいの語感。

事機 仕事の機密。

坡 坂または堤。宋の蘇軾の東坡の号もその意味。

短評 第一句は日常の業務、それは神経をすり減す類の激職からのしばしの解放を咏ずる。この第一句があるから、のど

かな田園風景も平板な写景ではなくなっている。中津・宇佐平野は大分県第一の平野であり、水田がどこまでも続く。互に田植歌を呼びかわし合うころの光景が鮮明で、宋詩の田園詩の風格がある。

福沢一族交遊関係 藩校進脩館において藩儒野本雪巖に師事し、さらに日出の帆足万里に師事してその学才を認められた

百助には、仕事の上での上士との交渉の外、身分を超えた学友も多い。この詩の某氏の別荘も、藩の上級士族のうち心安い者のそれであろう。

石河幹明著『福沢諭吉伝』（岩波）第一巻6頁にも、上士階級の学友猪飼太兵衛（正典）〔正典の父正範ではなかるうか〕から百助に贈った詩を掲載する。追記及補正の河北展生氏の考証参照。

現代語訳

仕事の悩み逃れ来て

いま逍遙の野辺歩き

田にはさざ波夕山の

村にこだます早苗うた

（作品24） 送田中子貞再游于南豊

田中子貞の南豊なんぽうに再游するを送る

星霜三年別 星霜三年の別れ

今茲初帰郷 今茲ことし初めて郷に帰る

何為突未黔 何なんす為れぞ突とつの未まだ黔くろからざるに

離兮再参商 離いれて再び参まと商あとなる（亭↓兮）

自古重生別 古いにしえより生いと別わかれとを重かさんず

誰不泣河築 誰たか河かり築よに泣なかざらん

縦有扛鼎力 縦たえ鼎たを扛にうの力ちからあるも

離愁破無方 離愁い破やるに方かたなし

帰期知何日

帰期何れの日かを知らん

願令今夕長

願くは今夕をして長から令めんことを

挽之不可止

之を挽くも止む可からず

相去何忽忙

相去ること何ぞ匆忙たる

徒羨雲中鴻

徒らに羨む雲中の鴻

鼓翼獨南翔

鼓翼独り南翔するを

我記曾遊地

我れは記す曾遊の地

隨処弄風光

隨処に風光を弄び

射雉度野水

雉を射て野水を度り

採蕨下高岡

蕨を採りて高岡を下る

芳樹鹿門月

芳樹鹿門の月

春帆齒海航

春帆齒海の航

南豊真可遊

南豊真に遊ぶ可し

我復欲趣装

我れ復た装に趣かんと欲す

欲去不可去

去らんと欲るも去る可らず

坐使中心傷

坐ろに中心をして傷ま使む

語釈

突黔 黒ずんだ煙突。『淮南子』「孔子無黔突、墨子無煖席。」

兮 『楚辞』に多用される語氣詞、リズムを整える働きをする。

参商 参と商、いずれも星の名称。両星その距離遠く、別れて久しく会えない比喩として常用される。

築橋。旅に出る人を送るとき、川べりで別離の宴を張る習慣が中国にあった。唐の柳宗元「送薛存義序」にい
う、「河東薛存義將行。柳子、載肉於俎、崇酒於俎。追而送之江澗、飲食之、……」
鼓翼 羽ばたきをすること。

齒海 つばみのような海、入江を指すか。万里の仕えた日出は国東半島南端、別府灣に臨む。木下氏二万五千石、

分封前は三万石。万里はその重臣の家に生れた。城の直下の海に天下の珍味、城下しろしたカレイを産する。

鹿門 すなわち鹿門山、後漢末の龐徳公が仙薬を求めて入山。唐の孟浩然も隱棲。明の唐宋派の詩文家茅坤は鹿門
と号した。

南豊 豊前が北豊であり、豊後が南豊。また宋の文章家曾鞏の出身地の名称でもある。

福沢一族交遊関係 田中子貞は中津の人で、日出の帆足塾に再遊するのであろう。百助はかって帆足塾にあった日々を回
顧し、職務にしばらくおかれてかれ自身の再遊の希望の空しいことを語る。

ただし大塚富吉編著の『帆足万里先生門下小伝』には百助の名はあるが、子貞の名は見えない。

(作品25) 送某氏遊上国 (野本君美之京↓某氏遊上国)

某氏の upper 国に遊ぶを送る

送君南浦心不平 君を南浦に送りて心平かならず

離亭慇懃侑兕觥 亭を離るるに慇懃兕觥じこうを侑すすむ

留君欲語別離恨 君を留めて語らんと欲す別離の恨み

無邊江樹含秋聲 無辺の江樹秋声を含む

天衢秋高素月苦 天衢秋高くして素月苦み

銀漢倒流瀦江城 銀漢ぎんがん倒さかまに流れて江城に瀦そそぐ

鱸魚美兮秋風起

鱸魚美うまくして秋風起り（己肥↓美兮 下↓起）

梧桐落兮旅雁鳴

梧桐落ちて旅雁鳴く（尽↓兮）

游子此時泣非土

游子此の時土に非ざるに泣かん（此時游子↓游子此時）

問君何為獨遠行

君に問う何なんぞ独り遠行するや

海路千里柔臚五

海路は千里柔臚じゆうろは五（東走↓千里、一百↓柔臚）

渺茫無際通水府

渺茫際なくして水府に通ぜん

況又高秋海若驕

況んや又高秋海若の驕れるを

漫天惡浪相鼓怒

漫天の惡浪相あい鼓怒し

飛霜凜冽八嶋月

飛霜凜冽たり八嶋の月

愁雲慘澹一谷雨

愁雲慘澹たり一の谷の雨

鳥不肯飛人愁絕

鳥は飛ぶを肯あせず人は愁い絶つ（飛は朱筆にて補入）

嗟君何為獨勞苦

嗟あ君何なんぞ独り勞苦するや

男子振作須自強

男子振作しんきくすべから須すべからく自強すべし

知君卓乎有剛腸

知りぬ君卓たつこ乎として剛腸あるを

慷慨欲為驚世語

慷慨して驚世の語をな為んと欲す（杖劍游千里↓欲為驚世語）

曾中詞鋒錐処囊

胸中の詞鋒錐のうにお処く

京洛垂帷齷齪徒

京洛帷を垂る齷齪の徒（多少↓京洛）

對君避易避雄鉞

君に對すれば避易雄鉞ぼゆうを避けなん

去矣此行須努力

去ゆけ此の行すべから須すべからく努力すべし

莫使斯文讓上国　斯文をして上国に讓ら使むる莫^なれ

語釈　兕觥　動物の角で作った盃、ここでは単に盃。

侑　励める。「侑酬」で酒食などをすすめること。

無辺　はてなきこと。杜甫「登高」に「無辺落木蕭蕭下、不尽長江滾滾來」とある。

素月　白き月光

江城　中津城は山国川の河口にある。

非土　故郷の土地ではないという程の意味か。

水府　水神の居所。

海若　海神の名。

一谷　一の谷。八嶋も一の谷も源平の古戦場。いずれも源義経の奇襲と平家敗戦の哀史で名高い。

振作　振いおこす。

錐処囊　（平原君曰、）士処世、若^ニ錐処^ニ囊中。（『十八史略』）『史記』平原君伝に詳しい。穎脱は毛遂の言葉には
じまる。

京洛垂帷　この頃、頼山陽京都で私塾を営む。帆足万里は山陽の『日本外史』の文章を評価しない。『福翁自伝』

に見える論吉の師、白石照山（常人）の山陽の文章評価が低いのも、亀井風、帆足風というべきか。純粹な
亀井風（徂徠学）を目指す照山は、折衷的な淡窓をも評価しない。

齷齪　アクサク（アクセク）心せまくこせつくこと。

鉞　鉞・鉞とおなじ。

斯文　信奉する道、学問。

福沢百助著『果育堂詩稿』(一)

上国 ジョウコク 上方^{かみがた}地方の呼称。

補説

○第三句から第六句まで朱点が施されている。○中津藩には白石照山以前は、伊藤仁斎・東涯系の学問の流れと、若年のところに懷徳堂に学んだ帆足万里の学問の影響があり、京都・大坂の学問との関係は深い。また当時の九州の儒学の水準はきわめて高く、このような背景のもとに「莫使斯文讓上国」の句が生れたのであろう。この関係を追求めた論文に、宮本又次「九州の文人と大坂・南冥・旭莊・言道と緒方洪庵」(『西南地域史研究』所収文献出版昭和55年刊)がある。

○「幕末、淡窓の咸宜園に天下の逸材が雲集し、時運に応じて、社会各方面に活躍したのも、皆、この亀門の学によって、発するのではないかと、私はひそかに思っている。少くとも幕末の儒学界に「学西せり」の評があって、九州儒学界の隆盛を見た、その魁は、ここにあったことは、間違いない。(中村幸彦「亀井南冥・昭陽全集」の刊行に寄せて『亀井南冥昭陽全集』第一巻月報所収)。

○『左伝』学・『左伝續考』三十巻は、昭陽の数十種に上る撰著の中でも格別に浩瀚な一大労作であって、老熟期の彼が全精力を傾注した亀門経学の代表的名著である。当時、西海の儒者たちの間では、各地の碩学の經典講釈を目して、「詩経は万里、左伝は昭陽」という評が立っていたという(岡村繁「亀井南冥昭陽全集」第三巻解説)。

○左伝学は亀井系の中津の白石照山に伝わり、それが照山の漢学の弟子諭吉の左伝愛好につながる。諭吉の文章には明かに『左伝』の影響が認められる。

○百助の師、帆足万里が文化七年秋八月(一八一〇)に書き、それによって弟子たちを教育し、百助の蔵書となった『修辞通』(写本・拙稿『史学』第四十九巻第二・三号「臼杵図書館蔵福沢先生遺籍解題初稿」参照)は、徂徠および東涯の文論・詩論を多く踏えている。もちろん中井竹山にも『肄業余稿』において敬意を払っている。

○広瀬淡窓『遠思楼詩鈔』(天保六年)は、大坂の篠崎小竹、筑紫の亀井昭陽・豊後の帆足万里の序文が冠せられている。

福沢一族交遊関係 文政四年辛巳九月二十一日、父兵左衛門病死す。『福沢全集』第二十一卷所収系図の百助の項に、「文政四年辛巳家督」とある。

翌五年四月に結婚、十一月にはいよいよその半生を埋めた大坂蔵屋敷勤務に就くこととなるのである。諭吉を末子とするその子女五人は、すべて大坂生れである。(昭和五十六年一月二十三日)

追記及補正

○(作品5の一)(作品18) 桜井温夫

河北展生氏よりその経歴補充。当主次峯・兵左衛門(明治五年写中津分限帳では二百石取り家格供番)の弟。次道・兵右衛門。

文政二年十二月三日 二人扶持頂戴 表御小姓江被召出

三年三月廿八日 近習

五年三月廿五日 宛行拾五石頂戴

七年三月 御参府御供御道中御供頭相勤在番下命

十年五月 八日 元々郡奉行御破損奉行兼帯

八月十三日 御役出精二付役扶持三人扶持頂戴

天保元年五月廿五日 有故御暇

○河北展生氏より(作品23)猪飼太兵衛(正典)について。石河幹明著『福沢諭吉伝』は正典よりの百助への贈詩を掲げるが、

正典・芳太郎・助五郎は正範の子。天保十年九月九日学館塾長を下命されている。

父正範は丸岡東馬実明三男

文政二年 八月十五日 御目見

三年十一月廿四日 御広間御番入

九年 三月廿二日 無給ニ而数年一番方出精ニ付上下料三百疋ヒ下置

五月十一日 表御小姓ヒ召出二人扶持

十一年十月廿八日 劔術皆伝ニ付御上下料三百疋ヒ下置

天保五年三月廿二日 親正弼御用人モ仰付候ニ付三人扶持ヒ下置候

天保九年九月廿七日 家督

祖父正弼

天保六年七月 妻死去ニ付御悔之御書ヒ成下候

天保九年七月十八日 病死、于時六十八才

右の点から百助に贈詩は正典ではなく、その父正範であろう。(河北展生「福沢百助の大坂在番と中津藩士」(『福沢諭吉

年鑑』7) 参照)

○(作品10) 中津藩儒倉成竜渚について。森鷗外『伊沢蘭軒』その六十五に、「茶山は頼杏坪が江戸に往来しなくなった
り、倉成竜渚が死んだり、尾藤二洲が引退したりしたと云うような江戸の時事が知れぬのは困ると云っている」その六十
六、「倉成竜渚の歿したのは前年文化九年十二月十日で、齡は六十五であった。……初め京都に入って古義堂を敲き、後
世子昌暢の侍読となって江戸に來り、紀平洲等と交った。……諸書に見えている此人の伝は、主に樺島石梁の墓表に本ず
いているらしい」

○(作品1) 短評と正誤。内山知也氏(筑波大学教授・中国文学)より。「乞食を詠じた詩はいかにも力作で、すばらし

だと思います。走如黄犢というのは黄犢の誤植かと思われませんが（杜詩に「憶年十五心尚孩、健如黄犢走復来」の句がありますので）実に落着いた詩ですね」すなわち黄犢が正しい。

○評価と（作品5の二）正誤。前野直彬氏（東京大学名誉教授・中国文学）「福沢百助の漢詩は、あの時代の漢詩人の一般的な水準を示すものだと思います。こうした平均的な詩人は、数が多かった筈ですが、大詩人にくらべてほとんど紹介されていません。その意味からも貴重な資料を提供されたものと思います。……作品例5の二の詩の二句目ですが、何の為にかとあるのは、何為なんすればと読むべきでしょう。ここは一句の第二字で、第四字と平仄が逆にならなければならず、為ためと読むと現代語では四声になり、これは仄で四字目と平仄が同じになってしまいます」以上により「何為なんすれば」と訂正。

○（作品4）補説二行目、つい↓ついに。

（作品5の二）語釈二行目、呉江松↓呉松江。

（作品9の三）語釈二行目、送三元二使二安西詩↓送三元二使二安西詩。

○（作品6）増注。金谷治氏（東北大学教授・中国哲学）「桂は木犀ということを読んだ記憶がありますが、もしそうなら香の句との対応がよく分かるように思います。○評価…西岡弘氏（国学院大学教授・中国哲学）「福沢先生の御父上がこうしたすぐれた詩を残していらっしやいますこと感銘致しました」。